

備北だより

号(発行) 備北百人委員会
 (連絡先) 大阪市東成区玉津二丁目
 東成玉津郵便局留
 第六号
 (振替口座) 大阪79064

備北を離れて2カ月余、「仲間人共同体」というみじめな状況のなかで続けた土地捜しの結果、私たちはやっと、広島根原郡御所村に、自分たちの土地を手に入れることができた。7月初めから、先発隊秋岡・村瀬さんが住みこみ、7月7・10日に備北用拓からの引越しをすませ、私たちの「赤栄之郷共同体」は、歩き始めた。

そのオーストリアとして、赤栄之郷共同体でのオーストリアが8月12・15日に行なわれた。呼びかけに応じた参加者は、常駐者を含めて10名であった。

備北との離別を、オーストリア共同体運動への出発として位置づけに私たちは、赤栄を中心として、これからどのように共同運動を創りだしていくか、これが、大前提のテーマだった。キャンプでは、地理的に孤立状態をどう乗りこえるか、そのための百人委員会思想をどう創っていくか、が一番の問題点であった。そして、「われわれ」のなかの「われわれ」が指摘された。

「われわれの地点を切りあてることなく、われわれの運動を具体的に創りだす」ことは、キャンプ討論上の結論ではない。これからの運動そのもののあり方として、同時に、「この備北だより」の編集に、具体的に描きだしていきたい。

〔赤栄発・K・H〕8月12日夕方4人よそ人が到着してキャンプの参加者10人がそろった。夕食後、全員に知られていない人のみ自己紹介して、これからの備北と赤栄の経過報告を「やさかつしんNo.1」をもとに秋岡氏が話す。

13日の午前は車作業の農地講習。耕運機と草刈り機・フォークの使い方と理った。だが、4人のうちSaさんだけが耕運機のエンジンをかけることができたのです。お昼ごはんは池田氏が5月のすっぱいおすしの名譽挽回のカレーソーメンとおすいもの(おすいものがおいしかった、オセジ抜きで)。

午後からは広島の運動・販売についてで、きき、下地づくりについて10月末にミカンの販売をしてみようという話が村瀬さんから出た。

れた。宇和島で彼の「草の根通信」の仲間がミカンを作っているそうなので、そこでミカンを買って広島まで運んで主に団地で販売しようというもの。20箱くらいとばせば、ガソリン代、フェリー代がうく計算になるらしい。また、シイタケ(10kg程度)と鶏卵をセットにして出荷しようという事も出た。

まずは広島での新入人材とアジト、田地自治会との結びをめぐりていこうという事。広島近辺の自立をめざして、という話をした。お金の件、土地代の25万円は「共同体共有券」運動で集め、他の引越費用、自動車車検、運送代等、30万5千円は常駐者の冬期出かせぎと定期キャンプで今年分を、来年は野菜等の売り上げから、として2年計画で返済することになった。

キャンプは、正月にオーストリア、整コミュンの成否(68参照)、広島での販売運動と百人委の実質化、をテーマに、整コミュン現地(只今捜し中)で行なうことになった。その他、詳しい計画表はp3に)

あいらみし

その後、村瀬先生による「日本の農業問題」次に鈴木先生による「教育と共同体運動」というテーマで勉強会みたいな話し合いがあった。のさやった。これについては、別の記事を。

14日は予定では水泳で水泳のはずだったが、夜に盆おどりがあつたので、予定をくりあげて、「経済的

この日は早めに入浴してオンドリをしめてカラ揚げの夕食。カンパのビール一打、またたくまになくなる。8時すぎ、フラフラと盆踊りに出かける。公民館の前の小さな空地に人の輪ができていく。さっさく我らも仲間入り。あちこちでめづらしい盆おどりと村のオバちゃんとの会話がみられた。(林)

討論 日本農業の破壊

生産者 消費者 共同体

村瀬氏のレポートでは、I 資本の農業破壊による収奪、II 農業破壊の政策、III 破壊の実態（A 農業生産、B 農民の生活）、最後に日本農業を守る発展させる運動（A 国・自治体・企業に対して、B 農民自らの創意工夫で）とテーマが進められていた。

最初にI・IIでは、企業と政府とが一体となって高度工業化社会へと邁進していることが明らかと

まず、このミーティングは農業生産に携わる那栄郷共同体に関わっているから、日本の農業問題の基本的概観すら掴み取っていた。キャンプ参加者達にとって、有効な知識共有作業となつた。

なる。即ち、生産性向上を至上目的とする資本側が、工業用地、工業用水を確保しようと躍起になり、政府は、新都市計画法、農地法の改正、農業振興地域整備法などでその要請に従い、用地確保推進政策をたてている。次に、IIの破壊の実態では、自給率の低下、農地の減少、就業人口の減少のそれぞれについて、具体的数値からいかに農業生産の破壊が進められているかが示され、又、兼業化、出稼ぎ、健康破壊、借金問題等で農民の生活破壊が説明されている。

全般的に感じたことは、I・II・IIIを通じて、常に農業生産者の側から、日本農業の破壊状況が説明されてきたことである。例えば、農産物の自由化、食糧制の問題の取扱い方に見られるように、生産者の側から見れば問題なのであろうが、消費者の側から見ればどうなのかという点。生産者と消費者が、それぞれのエゴイズムをふりかざすのではなく、そのギャップを埋

める作業として何をしなければならぬのか。それは、農業共同体としてどうやくその一歩を踏み出そうとしている那栄郷共同体の課題であり、また、都市生活者である私達がいかに農業共同体と関わ

らぬのか。それは、農業共同体としてどうやくその一歩を踏み出そうとしている那栄郷共同体の課題であり、また、都市生活者である私達がいかに農業共同体と関わ

キャンプ終わって 一息ついて、 すすきはじめ

っていけるかを考える場合にも、生産者、消費者の立場に固執するのではなく、そこから一歩踏み出て、共同体の場で、農業の問題に関わること、有効な問題解決の道が生まれる。(新)

介しなかった。この強いられた打ちの状態をまがきながらも支えているのは、運動の困難さを覚悟しているからである。誰かが言っていた。共同体運動をしている間は勝っているのだ。負けることは自らが敗れることだし、こう思っている。続けるしかない。どうにもならぬ。シンドイと吐くことはたやすい。しかし、シンドイのは、そんな言葉と奥歯にかみしめ運動することである。大学斗争中でも、活動が尻つぼみになるにつれて、トアクに悲壮感が伴った。そして、バラバラになった。

今、備北……運動は、運動量が少ないと感じる。これから運動量を増加せねばならぬ。土地探しで汲み、ようやく土地を購入したばかり。備北の土地を追い出され、ニコニコの生活を始め、約一ヶ月半しか経っていない。共に運動し、生活した人間と離別することは悲しい。当時者にとっちはどうしようもないほど。しかしながら、離別することがわかっていても、なおそこから出ていけないのは、もっとも、と辛く哀しい。向哲人共同体などと、自動的に呼称し、新しい土地を見つかるまでと、備北で焦燥と戦いながら、一ヶ月間生活したのである。土地を保持していることは権力である。絶対に、土地所有者を否定しなければならぬ。共有券運動は、徹量ながらも、この否定を行う。ごめ、はじめのころ、という情熱を感じる。情熱を持つことは簡単である。向いは行動で決まる。

今、備北……運動は、運動量が少ないと感じる。これから運動量を増加せねばならぬ。土地探しで汲み、ようやく土地を購入したばかり。備北の土地を追い出され、ニコニコの生活を始め、約一ヶ月半しか経っていない。共に運動し、生活した人間と離別することは悲しい。当時者にとっちはどうしようもないほど。しかしながら、離別することがわかっていても、なおそこから出ていけないのは、もっとも、と辛く哀しい。向哲人共同体などと、自動的に呼称し、新しい土地を見つかるまでと、備北で焦燥と戦いながら、一ヶ月間生活したのである。土地を保持していることは権力である。絶対に、土地所有者を否定しなければならぬ。共有券運動は、徹量ながらも、この否定を行う。ごめ、はじめのころ、という情熱を感じる。情熱を持つことは簡単である。向いは行動で決まる。

「教育と共同体運動」というテーマ・レジュメの作製者として約五時間余を費した。話し合いを終えて何を得、何が変わり、これから何をしようとするのか、ここに記す。

共同体は反逆のための根拠地である。この反逆の根拠地では、教育はどのようなものになければよいのか。

討論の前までは、公教育の逸脱即現在の教育制度との拮抗としてとらえ、早急なる共同体での教育のシステム化を問題にしていた。しかし、討論でこの飛躍が指摘された。つまり、教育の自己否定、多様性を保障する教育が、共同体内部でも必要であるというのである。なぜなら、アメリカとしての子供を、国家が管理する教育制度のもとでそれを利用し、権力を強化するという型を形成するのと同じく、根拠地として

教育と共同体運動

多様性を保障する教育とは

はじめ

共同体で共に戦いうる人間を形成するというのが、一つの型にあってはめるものである。

だが国家の中での矛盾した存在としての共同体では、確かに相互扶助を説いた所で、又疎外のない苦痛と感じない労働が人間を人間的に形成すると説いた所で、肉体的に影響を与えるだけである。な

援に殺そうとしているものに対して戦わねばならぬのである。ブーバーは教育論で次のように言う。

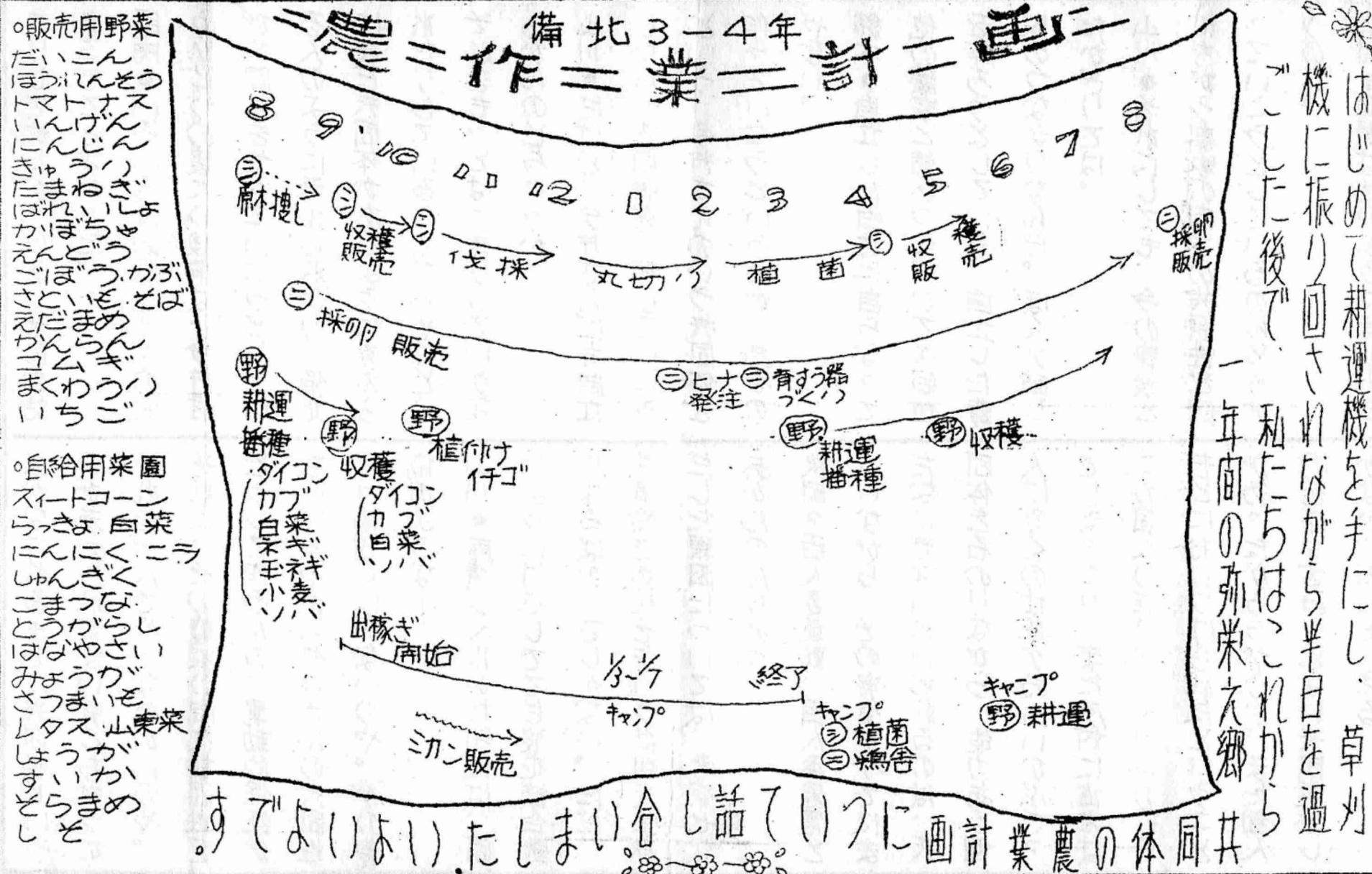
「誰か、ある人が彼を、創造者としてではなく、この世に送られてくれている一蓮託生の被造物者として、彼の手を握り、芸術を越えたとここで、彼の仲間、友人、愛人である時のみ、彼は相互性を自覚し、それに参加するのである。」

この文章の中の「仲間」というのを、「共同体の仲間」と置きかえたい。そして「仲間」に訴える。

我々と精神的に心中するような人間関係を創りあげようではないか。

今だ備北共同体運動は弱体なのである。信頼のないうちに連帯は求めない。共同体又は共同体運動への信頼こそ、今後、創造していく課題であり、子供に対する教育の自己否定の原点でもある。

備北3-4年 農業作業計画



はじめめて耕運機を手にし、草刈機に振り回されながら半日を過ごした後で、私たちにこれは、一年間の充実大郷

めでよいよい。たしまい合し話していくに画計業農の体同共